

悠久の河

『紀行』

周藤彌兵衛翁物語

熊野大社

八世紀に編纂された『出雲国風土記』に、意宇川の源流は熊野山（現在の天狗山）とある。松江市八雲町に聳えるその山の近く、周藤彌兵衛翁の切り通しから車で十五分ほど遡った川の畔に「出雲国一の宮」熊野大社がある。

主祭神は「八岐大蛇（ヤマタノオロチ）」退治の神話（治水のたとえとも言われる）で知られるスサノオノミコト。黄泉国（よみのくに）から帰ったイザナギノミコトが穢れを祓った時、アマテラス、ツクヨミ、そしてスサノオが生まれたと『古事記』にある。古代出雲王朝の主・オオクニヌシはスサノオの子孫とされている。

熊野大社は、スサノオが火起こしの方法を伝えた、火の発祥の神社として知られ、毎年十月十五日に「鑽火祭（さんかさい）」が行われる。二〇一三年から始まった一連の遷宮行事で全国的に有名な出雲大社。その祭事（古伝新嘗祭）の食事を作る火を起こすために、出雲大社の宮司が燧臼（ひきりうす）と燧杵（ひきりぎね）を借り受けに熊野大社を訪れる。その時、出雲大社が持参する餅に対して、熊野の社人が「色が悪い、去年より小さい、形が悪い」などさんさん注文をつけてから火起こしの道具を授ける。「亀太夫神事」が行われる。また、出雲大社宮司の代替わりの際の「火継式（ひつぎしき）」でも、熊野大社の鑽火殿で起こした火が用いられる。「出雲国一の宮」の面目躍如と言えよう。



画 寺戸良信

熊野大社の近くには、現存する最古の大社造りで、国宝になっている神魂（かもす）神社や、スサノオとその妻・イナダヒメがまつられ、縁結びで若い女性たちに人気の八重垣神社など由緒ある施設が多い。

明治時代の作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、松江市で暮らした時の体験をベースに、日本文化を欧米に紹介する数々の作品を著した。ハーンは出雲を「神々の国の首都」と呼んだ。古代文明の痕跡が至る所に残されている意宇川流域こそ、その首都の核、古代出雲の中心地と言えよう。

近年、ハーンの世界を貫く「オープン・マインド」が注目されている。異国での経験に裏打ちされた、異文化を受容し、より高度な次元をめざすハーン「開かれた精神」を意味する。

朝鮮半島の対岸に位置する出雲は、古代において、海を渡ってきた人々と先住の人々とは、異なる文化を持ちつつともに生きた「和の文化」の息づく「開かれた地」だったと推測される。

四十二年間剣山の硬い岩を切り続け、人々を洪水の苦しみから救った彌兵衛翁が打った鑿跡がその志の崇高さを偲ばせる八雲の地。この地方から、世界恒久平和をめざし、新たな「和の文化」創造に向け一歩を踏み出そうと志す人々が現れ始めている——今、出雲から陽が昇る！